

---

魔書館 『P h a n t o m ・ S t a c k 』

是音

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

魔書館『Phantom・Stack』

### 【Nコード】

N4940A

### 【作者名】

是音

### 【あらすじ】

この魔書館では貯蔵された不思議で奇怪な物語を、奇人館長『ジョーカー』の案内でお客様と共に御堪能頂くことができます。どうぞお気軽にお入りくださいませ。

t i n t r o d u c t i o n †

おや？お客様ですか珍しい。いらっしやいませ。我が魔賓図書館

『Phantom・Stack』

へようこそ。今風にファンスタと略してくださって結構ですよホホホホホ！センス無し！ホホホホホホ！！

おっと、自己紹介が遅れました。私館長の『ジョーカー』と申します。以後お見知りおきを。

さてさて、貴方がやって来たこの図書館。ただの図書館ではございません。ここに収められている本一冊一冊の中に、不思議な世界のお話が一つずつ詰まっていますのですよ。

さあ、興味が湧いてきましたか？ここでは私ジョーカーが語り手として、お客様にその不思議なお話を堪能して頂くことができます。どうですか？興味は？

……ふむ。湧きませんか？まあまあ、宜しいではございませんか。少しゆっくりなさって行って下さいな。それではお試し用に一冊をご用意してございます。

ホホホホホホ！ごゆっくりどうぞ。

† d e m o n i a c † (前書き)

それではまずお試用の一冊目。さあ、参りましょ。お手をどうぞ

t d e m o n i a c t

さてさて、ここはとある貴族のお城の中。暗いですねえ、私は大好きですけど。……おっと失礼。

さあお分りのように、お客様は私と共に魔寶図書館に貯蔵されている本の世界を実際に旅することができますのです。館長の私自らがご案内させて頂く理由は、もちろん貴方様が気に入ったからでございますよホホホホホ！

さてお話に戻りましょう。赤い絨毯が敷かれた広い広いホール。ここはどこでしょうか？後ろに大きな扉がありますからきつと入り口ですね。目の前には左右に階段があります。どうやら二階へ続いているようです。行ってみますか？行ってみましょう。

二階への階段を昇り、一つしかない扉を開けると奥には長い廊下が続いております。蠟燭の明かりが無ければ何も見えないでしょうね。おお怖い怖い。やはり赤い絨毯が敷かれております。

おや？妙ですな、静かすぎませんか？

え？人の姿が見えない？おやおや、この住人が「人」だとは私一言も申し上げておりませんよ。しかし今回は残念ながらこの住人、人間でございます。ホホホホホ！残念ながら！ホホホホホ！……ん、失礼。

しかし廊下の奥行から見ても相当広い城のようですね。あ、ちなみに城というのは私の私見でありまして、本当は洋館とかそういった建物なのかもしれません。でも壁が石造りなんですもの、きつと城ですよ。

おっと、前に誰かいますね。男の子……でしょうか？お話を聞いてみたいところですけども、残念ながら我々は物語に干渉することはできません。

何かに怯えているようですね、廊下の端に座り込んでしまいまし

たよ。うーん、寝巻姿ですから今は夜ということですね。小さな男の子です。ご両親はおられないのでしょうか？

誰か来たみたいです。青年ですか、彼も寝巻姿です。

「クレイ様、いかがされましたか？」

「サバク！父さまと母さまがいないんだ！」

抱きつく少年の名前はクレイというようです。青年はサバク。おそらく執事のような役職でしょうか。クレイは両親がいない事を不思議に思い、探しながら彷徨っていたようですね。

サバクはクレイの手を取って立ち上がらせると、二人は奥へ歩きだしました。

「クレイ様、お勉強ははかどってますか？」

「う、うん。そ、そうだ！サバクはここへ来て一年目だったよね？」

「はい。まだまだうまく仕事がこなせなくて」

クレイはサバクと仲がいいのでしょうか、元気を取り戻して笑顔で歩いていきます。

「サバクはちゃんとやってるよ！父さまも褒めていたもの」

「ありがとうございます」

二人は廊下のつきあたりで両側に別れた道を左へ進みます。なるほどこの廊下の両側には扉がたくさんありますから、きっと二人は寝室へ向かっているのですよ。

ほらやつぱり。一つの部屋に入ると真ん中に大きなベッドが一つ備え付けられております。枕元にはたくさんのおぬいぐるみ。趣味が合いますねえ、モンスターばかりですホホホ。

「さあ、もうおやすみなさい」

「父さまと母さまは？」

「私が探してまいります」

「……うん」

サバクはクレイを寝かしつけると部屋を出ました。どこへ行くのでしょうか？付いていって見ましょ。

あ、お隣の部屋ですか。中はクレイの部屋よりも大きく、二つのベッドがございます。クレイの両親の寝室ですか。

「……本当にいない」

確かにベッドは空っぽです。サバクは少し考えた後、部屋を出て再び廊下の奥へ歩きだしました。奥へ奥へ。突き当たりには古ぼけた木でできた扉。他の部屋の扉とは違うようです。怪しい匂いがしますねえ。

サバクが扉を開くと下へと続く螺旋状の石段が長く続いています。サバクはそれを降りていきますが、この階段の長いこと！先程いたのは二階ですが、この長さではとくに地下ですよ。何で地下に続く階段の入り口がわざわざ二階にあるのでしょうか？ま、そこら辺は怪しさ満点ですが考えないでおきましょう。

ようやく出口ですか。お客様疲れてませんか？疲れたら私ジョーカーがトランプマツサージを……。あ、結構？残念。

おっと、サバクが行ってしまいます追い掛けないと。やはり地下ですね、苔が壁に大量に付いています。天井からは水が滴っていますし、冷えきった空気が漂ってますね。ここに住みたいくらいですよ。

冷たい廊下を進むと重そうな鉄の扉がたたずんでいます。サバクは華奢な体を使ってゆっくりと扉を開けました。中は……

これは愉快！牢屋ですよお客様！しかも中に入れられている方がいるようです。

「調子はいかがですかご主人様？」

これはまた意外な発言。牢屋の中にいるのはどうやらクレイの両親のようです。

「こんなことをして一体なんのつもりだサバク！」

「あの子は無事なの？」

おやおや、サバクはどうやら犯人だったみたいですね。ま、なんとなく予想はしていましたが。

「ここから出てはいけませんよ。」

そう言っつてサバクは部屋を出ていくと、扉を閉めてさらに鍵を掛けてしまいました。

……？

あら、私達まで閉じ込められちゃいましたね。困った困った。クレイの両親は疲れた表情で座り込んでしまわれました。

「一体どうしたというのだ。サバクはよくできた男だと思っていたのに」

「それよりあの子は、クレイは無事なのかしら？」

「あの男を近くに置いておくのは危険だ。召使共も寝静まってしまうただらうからな。どうすれば……」

頭を抱える父親と母親。困りましたね。というかクレイという子が危ない気がします。

あ。

そういえば私達別にこの世界じゃ実体じゃないんですから、壁なんて意味ないですよホホホホホ……私が悪いですね。申し訳ございません。だから私のステッキを奪わないで下さい！

さ、さて。とりあえず壁は抜けられたことですし、サバクを追いましょう。おそらくクレイの寝室です。

さてクレイの寝室へやってきたわけですが、だれもいません。クレイはやっぱりさらわれてしまったのでしょうか？

ん？何か壁にぶらさがってますよ？

おや？

ホホホホホ！これはこれは！サバクじゃありませんか！胸から鹿の角が飛び出してますよ！剥製の上に串刺しにされたんですねえ。

クレイがやったのでしょうか？いやいや、彼にそんな力は……。  
とりあえずクレイの両親の所へ行きましょう。しかし串刺しとは……  
ホホホ。

またこの長つたらしい階段を降りるのですか、私あまり動くのが好きではございませんのに……。

「ツ！ギヤアアアア！」

悲鳴ですね。クレイの父親のものです。行ってみましょう。  
牢屋の中に何かがあるみたいです。入りましょ……おっと、何か  
が飛び出してきましたよ？これは……

我々が見上げるほどの巨体、蹄のついた馬のような足、全身毛皮  
に包まれ、コウモリのような頭部からは曲がりくねった角が二本。  
身体からは……ん、醜悪な臭いがします。

怪物は物凄い速さで地下から走り去ってしまいました。

おっと、クレイの両親は？

……おやおや、これは。私でも少々見るに堪えられない有様です。

さて、いかがでしたでしょうか？今回のお話、ここに住む召使達  
も後日無惨な死体で発見されたみたいです。唯一生き残った召使の  
証言では

『怪物は坊ちやまの寝巻をはいていた』

だそうです。ホホホ。しかしおかしいことに、周囲の方々が言うに  
は、その家庭にはお子様はいらっしゃらなかったらしいですよ。そ  
れと、サバクという男の正体は魔物の研究者です。あの城に潜入し

ていた理由はおそらくあの怪物でしょうね。

最初に私申し上げましたでしょう？

『ここに』住んでいるのは人間だけだと。ホホホホホホ！

本日御覧頂いたのは少々奇妙なお話でしたが、次回お越しの際はまた別のお話をご用意してお待ちしております。

ではまたのお越しを。

†carnival†(前書き)

いらっしやいませ。またお越しくださるとは光栄でございますホホ  
ホホホホ！さて、今回は少々心の温まるお話を、ご用意致してござい  
ます。では参りましょう。お手をどうぞ

†carnival†

さあ、やって参りました今回のお話の舞台。

少々昔のヨーロッパでしようか？活気に溢れる海に面した街でございます。傾斜のゆるやかな土地で、道の両脇に立つ塀は白く、この街全体に道は広がっていますからとても街が明るく感じられますな。我々が立っているのはどうやら歩道の交差点のようです。街の人々が道で立ち話をしたり、荷車で荷物を運んだり、和やかで気持ちのいい街ですね。

ん、私がそんなことを言うなんて意外ですか？……お客様、別には明るい場所が嫌いな陰湿な男ではございませんよ。確かに私の格好はハットもスーツもステッキも全部黒で、化粧した顔だけが白いです。がホホホ。

……顔に星や涙のペイントをする時点で陰湿？

ガアーーン！！

わ、私のルーツを根本から粉碎しないでください！とにかく！舞台はここでございます！

コホン、さて今回のお話の主人公ですが……

「もっつ、一体どこへ行ったのよジナ！？」

この街の娘、ユエルでございます。

「お前の猫、いつつもどっか行くなあ」

一緒にいる少年とどうやら飼い猫を探しているみたいですね。ずい

ぶん長い間走っていたのか、二人とも息が切れています。

「ジナったら、毎年この時期になるといなくなっちゃうの」

「この時期って、ちょうどラグーンカーニバルの時期だろ？もう明日だぜカーニバルは」

ふむ。どうやらこの街には毎年恒例のイベントがあるみたいですね。

「毎年ちゃんと戻ってくるんだろ？じゃあオレもう帰るぜ？」

「う、うん。ありがとう」

あら、少年は帰ってしまったみたいですね。ユエルも諦めたのか、帰路につこうとしています。付いていきましょ。

街はずれに古家が一軒ポツンと建っていますね。中へ入っていきましましたから彼女の家のようです。中に入ってみると、特に何もなくてテーブルと椅子、キッチン、暖炉等必要なもの意外はこれと目立ったものがない質素な家です。あと……絹織り機ですか？これを使ってこの子は日銭を稼いでいるみたいですね。

あとは……おや？古い写真がありますね。父親らしき人と写っているこの小さな子はユエルでしょうか？抱いている小さな黒猫は先程探していたジナという猫なのでしょう。

ユエルは猫の餌を取り替えた後、写真の前に立つと語り始めました。

「お父さん、やっぱりジナ戻ってこないよ。お父さんが死んじゃったから、私とジナの二人でずっと頑張ってきたのに。毎年この時期

になるといなくなっちゃうの。だからカーニバルの時期はいつも一人。そうだ！お母さんが生きていた頃、私はまだ何もわからなかったんだけど、よくカーニバルに連れていってくれたんだよね？私明日行ってみるよカーニバル！それで帰ってきたらジナがひよっこり待ってるかもしれないよねっ！」

そう言うとユエルは一人で夕飯を食べ始めました。可哀想に、まだ九つばかりの少女が両親を早くに亡くし、一人で夕飯を食べる姿など……。せめて今晚は私達と一緒にいてあげましょう。彼女から見えないのはわかっていますが、気持ちの問題でございます。

ユエルは寝る前に何やら押し入れの中で何かを探しているみたいです。

「……………あつた、これだっ」

さあ、カーニバル当日でございます。今年はユエルもカーニバルへ行くと言っていましたね。今までは行かなかったのでしょうか？ところでそのユエルの姿が見られませんが……………ん？

ワオー！！

ビックリしましたよユエル！これは仮面ですか？どうやらラグーンカーニバルは仮面をつけて参加する風習があるようです。昨晚探していたのはこれだったんですね。

おやおや、ユエルはご機嫌のご様子。微笑ましいですなホホホ。

さて、家を出たユエルは港の方へ向かいます。遠くでは花火が上

がり、微かに音楽が聞こえて来ます。ユエルの足取りも自然と早くなっけていきます。

「おや、あんたユエルかい？」

街のおばさんに話し掛けられたユエルは足を止め、仮面を外しました。

「こんにちはおばさん！」

優しそうな顔でおばさんは語り掛けます。

「こんにちは。珍しいねえ、あんたがカーニバルへ参加するなんて何年ぶりかねえ」

「へへへ、お父さんが死んじゃってからは行く気がしなかったけど、今年はホラ！」

ユエルは手に持った仮面を前に出してニッコリ笑いました。

「お母さんが付けてた仮面！」

「おや！どつりで見覚えのある仮面だと思ったよ。そうかいそうかい、じゃあ今日は楽しんでいらっしやい」

ユエルは大きく頷くと仮面を付けて走りだしました。……って、子供は元気で困ります。私動くのが苦手だというのに……。

あ、ちょっ、お客様まで！待ってください〜！

せえせえ……。こ、子供のスタミナというのは恐ろしいものです。それについていってしまうお客様もお客様ですが……。

さ、さて港に着いたわけなんですが。これは素晴らしい！今日は皆さん漁を中止して相当広い港全体をカーニバルの会場にしてみました。屋台や大道芸人達が並んでいます。どこまで続いているのやら。それにしても凄い人混みですね、ユエルを見失わないようにしなければ。

ホホホ、やっぱり子供ですな。屋台に目移りしておられます。それにしても愉快愉快！皆さん実に素晴らしい仮面をつけていらつしやる！

……。ですが少々私と被っているようで、私の個性があまり目立たなくなってしまうすな。ま、どうせこの世界の方々からは見えないのですから良いんですがね。

ヒューー！

いいぞー！

おや、イルカのショーまであるとは本当に街をあげた大イベントですな。ほー、これはすごい。私も飼っている魔獣達に芸を仕込んでみましょうかねホホホホホ！

ん、なんですかお客様？ユエル？ユエルならその水飴の屋台に……。って、いませんね。一体どこへ？

あっ！いましたいましたお客様！あそこです、誰かと一緒にいますね……。二人の青年ですか。様子が変ですよ。

「返して！」

どうやらお金の入った袋を奪われてしまったみたいです。どこにでもあぁいった俗物はあるものですね。子供から金を巻き上げるなど……

「うっ」

「痛っ」

おや。逃げようとする男達から誰かが袋を取り返してくれたみたいですよ。

黒いローブに全身を包み込み、真っ白な仮面を付けた巨大な人物。肩には黒猫を乗せていますね。

ん……黒猫？

「ジナ！」

ユエルは男の肩から飛び降りた黒猫を抱え上げ、ローブ男を見上げましたがそこには誰もおらず、男のいた場所には袋が落ちていただけ。男はいつのまにか遠くに立ってこちらを見つめています。ユエルはジナと一緒に追い掛けるみたいです。我々も行きましょう。

その不思議な仮面男は路地に入り、走っては立ち止まりを繰り返しています。まるでユエルをどこかへ連れていこうとしているかのように。

一体どこへ連れていこうというのでしょうか？まさか誘拐でしょうか！？

ユエルの足が止まりました。暗く人通りの無い路地を曲がるとそこは行き止まり。男の姿はありません。しかしユエルは立ち止まったまま動こうとしません。

「ここはお母さんとジナを拾った場所だ……」

どうやら見覚えのある場所みたいです。黒猫はある一点をぐるぐる回っています。ユエルは座って猫のふわふわとした背中を撫でながら語り掛けはじめました。

「ここはね、お母さん達と一緒にカーニバルへ来た最後の年にジナを拾った場所なんだよ。お父さんとはぐれて、いつのまにか裏道に入っちゃって。そしたら二人で段ボールの中で身をくるめて捨てられていたお前を見つけたの。」

お母さんは一人ぼっちは可哀想だと言って連れて帰ることにしたんだ。名前を付けたのは私なんだよ？

でも……丁度その年にお母さんは病気でいなくなっちゃったんだけどね。それからしばらくしてお父さんも漁に出たまま帰ってこなくなっちゃった。だから今までお母さんに教えてもらった絹織で生活してきたんだよ。

……ジナも知ってるよね？私、ジナがいるから今まで頑張ってたんだよ！私平気だもん！ジナが……」

猫はニャアと一声鳴き、それを聞いたユエルは言葉を詰まらせてしまいました。

「でも……それでもやっぱ寂しいよジナあ……一人は……寂しい、よあ。ぐすつ、う……ええ……うわああああん！」

ユエルは泣きだしてしまいました。やっぱり寂しかったのですね。仮面を外すと顔をぐちゃぐちゃにして泣き、涙がぼろぼろこぼれ落ちていきます。

猫と一緒に寂しくないかと強がってはいてもやはり小さな女の子です。泣いてしまうほど寂しいに決まっております。

猫に頬を舐められ、しばらく泣き続けたユエルは周囲の異変に気が付いて顔を上げました。目の前に広がる光景に驚き、涙はピタリと止まってしまいました。

これは私も驚きです。我々は路地にいたはず。ですがここはユエルの家ですか。

ユエルも玄関口に立って茫然と辺りを見回しています。おっと、奥から誰かが出てきましたね。綺麗な女性です。手にはシチューの皿を乗せています。もしかこの方は……

「お母さん！」

ユエルは驚いて思わず叫んでしまいました。さらにテーブルには大柄ですが優しそうな顔をした男性が座っています。この方は写真に写っていたお父様ですね。

テーブルに料理を乗せたユエルのお母様が立ち尽くすユエルの方を向いて手招きしています。

「何してるのユエル？早く座りなさい」

「え？」

お父様は料理を見て満足そうに匂いを嗅いでおられます。

「ほらユエル！母さんの料理が冷めちゃうじゃないか。早くしなさい。ジナもおいで」

主人に呼ばれたジナはトコトコとテーブルに向かい、ユエルの方を振り替えると《早くこい》というように一声鳴きました。

「う、うん！」

涙を拭ったユエルはテーブルに座り、久しぶりに家族の温かみを感じました。

「あのねあのね！私、お父さんもお母さんも大好きだよっ！」

ユエルの明るい表情を見たご両親は暖かい笑顔で娘に接します。

ニヤア

「聞いてよお母さん！ジナったらこの前……」

ホホホ。さて、私達が一家団欒を隠れて見ているのも野暮ってものではな。ここら辺で戻ると致しましょう。

なかなか、私も思わず笑みがこぼれてしまう子でしたな。

お祭りというものは何らかの神を讃えて行われるものです。今回の場合、偶然カーニバルに混ざっていた神様が、一生懸命に生きるユエルに一時のご褒美を与えてくださったのかもしれないね。もしかしたらあのローブの男が……？  
ホホホホホ！まあよろしいではございませんか。

ところでユエルのその後ですが、やはりあれは幻であり、最後にはあの路地に戻ってしまったようです。しかしユエルは悲しみもせず、また次の日から飼い猫のジナと一緒に明るく元気に生き続けたということです。ま、彼女なら大丈夫でしょう。この後の人生は幸福でいっぱいだと思いますよ。このジョーカーが保障いたしますホホホホホ！

さあ、今回のお話いかがでしたでしょうか？我が魔寶図書館には様々な物語を貯蔵してございます。次回お越しの際はまた別のお話をご用意してお待ちしております。

ではまたのお越しを。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4940a/>

---

魔書館『Phantom・Stack』

2008年8月29日18時27分発行